

憲法九条の会・岩岡 ニュース 第89号

2015・3・6発行

発行人 堀口照美／編集人 白井篤子

「取り戻したがり病」の、チーム・アホノミクスから私たちがめざす場所は

浜矩子講演会「幸せのための経済学～アベノミクスのゆくえと9条～」から

2月22日(日)午後、西神オリエンタルホテル翔雲の間を会場に、浜矩子(エコノミスト・同志社大学教授)講演会が行われました。500人を超える人たちで、立ち見も出る盛況でした。岩岡からも20人近い人たちが参加しました。以下に要点を紹介します。

アホノミクスという言葉を使うわけ

私はアホノミクスという言葉はずいぶん前から使っておりますが、アベノミクスという実に怪しげな、おぞましい言葉を使わずに安倍政権の経済政策についてあれこれものを言っていきたいというので、何か代わる言葉はないかなあと思っている中でふとアホノミクスという言葉を思いついてしまったのでそれを使うようにしております。

経済活動は人間固有の営み。人間を幸せにするために、人権の礎となるためにある

我々人間は他の生物と共通点を持っています。しかし経済活動を営む生物は人間しかおりません。人間による人間のための人間しか行わない営み、それが経済活動です。従って経済活動というのは人間が人間を幸せにするために存在するのであって、その経済活動のあり方を分析するのが経済学です。

しかし我々の日常的な現実の中で「ほんとにそうかよ」と違和感を持つ方も少なくないと思います。現実には経済が全面に出れば出るほど、人間は背景に退くことを余儀なくされる、経済効率とか収益性がひたすら追求され、その結果として人間はないがしろにされる、それが現実じゃないかと思われることが結構あるかと思えます。しかし現実がそうであるからといって、経済活動だから人間のこともなんかも配慮されないのは致し方ないと我々がそのように思ってしまうと、本当に経済活動は人間を痛めつけるものになってしまうわけで、ここを我々が間違わないようにしないといけないと思います。

「ブラック企業」という、人間を不幸せにする、人権を踏みこむような行動をとっている集団や組織は経済活動とは認めない、「ブラック」でとどめておかななくてはならない。そういう認識を我々が持っているということがアホノミクスの正体を見極めていく、その向こう側に行くために非常に重要な出発点になると思います。経済活動は人権の礎であってこそ経済活動という名に値する、そういう目を持って我々の周りの営みを見ていくということが必要です。

アホノミクスというものはいかなるものであるか

安倍首相は、安倍政権は経済最優先でいくとずっと言い続けてきました。これは別に優先したいことを隠蔽するための言い方だということが次第に分かって来ましたが、それはそれとして彼が経済最優先ということを非常に強調してきた、それを素直に受け止めるとすればそれは「安倍政権は人間最優先、人権最優先でいく」と言っていると解釈してしかるべきだと思います。ところが安倍さんの所信表明演説、今開会中の通常国会で行われた施政方針演説にも人間という言葉は一度も出てきておりません。いかに人間を軽んじているか、人間を幸せにするためにある経済活動に働きかけていく経済政策に人間が登場しない、人間に目が向いていないという意味で、彼らが提示しているものはもはや経済政策という名にさえ値しない、アホノミクスと呼ぶこと自体過大評価であると、私としては今やそのように認識するに至っております。経済最優先と言いながら人間に目が向いていない、はやりやまいどうしてこんなことになってしまうのか、

チーム・アホノミクスは、たちの悪い流行病「取り戻したがり病」に犯されている

ちなみに「取り戻したがり病」というのは、必ずしもチーム・アホノミクスに固有の病ではなくて、グローバルな経済社会の津々浦々で流行っている。例えばロシアのプーチン氏はロシア帝国を取り戻したがりであるし、「イスラム国」も大いに取り戻したがりであるものがある。そしてチーム・アベノミクスが取り戻したいものは大日本帝国であるということが非常に増えてきた気がします。一番「取り戻したがり病」のえじきになりやすい体質を持っていた日本の安倍政権が一番激しい形で「取

り戻したがり病」にかかっていると思います。それが証拠に、彼らが2012年12月に政権を手に入れた時、彼らが掲げた言葉は「日本を取り戻す」でした。その「取り戻したがり病」の熱に浮かされているがゆえに、経済活動を見る目も完全に狂っていると思うのです。

昨年2014年の総理年頭所感には、「取り戻す」という言葉が3回出てきました。1番目は「強い日本を取り戻す」、2番目は「強い経済を取り戻す」、3番目は「誇りある日本を取り戻す」、3つ揃い文になると、考えていることがよく見えてきます。すなわち、強い経済を取り戻すことによって強い日本を取り戻す、強い日本を取り戻すことができれば誇りある日本を取り戻すことができる、そこには力強さというものに対する強いこだわり、執着があります。平和な日本でも、優しき日本でもない、強い日本でなければならない、そのためには強い経済でなければいけない。人を幸せにする経済ではなくて、あくまでも強い経済にこだわっている。そういう力と強さへの執着が「取り戻したがり病」がもたらす発想、精神性なんであることがよくわかります。

力と強さに執念を燃やす「取り戻したがり病」に犯されると、どんな症状が

症状その1、見るべきものが見えなくなる。症状その2、考えてはいけないことを考えるようになる。何が見えていないのかというと、現状における日本経済の真相、何が今の日本経済において最大の問題であるか、ということが見えていない。「取り戻したがり病」に犯されていない私の澄んだ目で見ると、日本経済が壊れたホットプレートに見える。やたら熱が通るホットスポットがある一方、永久凍土みたいなコールドスポットがある、2極分化してしまっている壊れたホットプレート、それが今の日本経済であると思います。コールドスポットに座っていることを強いられているのが、非正規雇用の皆さん、ワーキングプアと言われる人々、構造失業者と言われる1年以上仕事がない人、貧困者、貧困世帯と分類されているご家庭の皆さんですが、この欠陥ホットプレートを均等に熱が行き渡るように修繕することこそが政策責任者たちの最大の課題です。今仮に調子がよくなっているように見える面があるとすれば、それはホットスポットの浮かれ騒ぎだけがそのような雰囲気を出しているに過ぎないということです。

壊れたホットプレート現象というのは“豊かさの中の貧困問題”である

日本は世界に冠たる豊かな経済社会ですが、そのただ中に貧困問題がある。富の偏在現象が悪化しているということで、その辺を指摘しているトマ・ピケティさんの『21世紀の資本』が大売れしている。

日本における貧困世帯というのは、年間所得が120万円に満たない世帯、その人々が人口に占める割合が16.1%、これが日本の現状です。これは先進国としてあまりにも高すぎる数字です。主要先進国34ヶ国の中で、日本の貧困率は29番目、日本より貧困率が高い国は、アメリカ、トルコ、メキシコ、イスラエル、チリ、この5ヶ国しかありません。日本のようにこれだけ経済社会の成熟度が高い国で貧困率が高いというのは大きな問題です。これを何とかしなければ日本経済がまともに回っていきはざがありません。が、それは「取り戻したがり病」に犯されている人たちには全然見えない、あるいは見る気がない。彼らは自分たちが取り戻したいと思っているものを取り戻すことに役に立ってくれる人たちさえ元気になればいいと考えて、壊れたホットプレートのホットスポットしか見ていない。ホットの方をさらにホットにしていけば、だんだん冷たい方も温かくなるよ、という言い方をしていますが、それは一応アリバイ作りでそっちのことも見てますということを印象づけるために言っているだけで、本気でそちらに温かみが伝わるかどうか心配していない。日本経済が当面している最大の問題が見えない、見るべきものが見えないという症状は相当に深刻なものになっています。

じゃあ何でそうなるの、というところで2番目の症状である、考えてはいけないことを考えるようになるという問題、それは彼らが

国民国家における国民と国家の関係を逆転させたいと考え始めている

ということですが、これは実に恐ろしいことです。近代的で民主主義的な国民国家における国民と国家の関係は、国家は国民に奉仕するために存在するというものです。国民のためにまともな生活が保障される、その状態を保ち増進するための仕組みとして国家がある。国家は国民を唯一最大の顧客とするサービス事業者で、国民というお客様に対して公共サービスという財を提供することを通じてサービス事業者としての機能を発揮する、それを前提に我々は税金を払って国家を養っている、これが近代的民主主義的国民国家における国民と国家の契約関係です。

ところが「大日本帝国を取り戻す」と気張っているチーム・アホノミクスにおいては、この国民と国家の関係を逆転させる、国家のために国民が奉仕する、サービスを提供するという関係を打ち立てよう

としている、この絶対に考えてはいけないことを考え始めているところに、彼らの「取り戻したがり病」の深刻さ、重症さが表れています。彼らが言うところの「憲法改正」は文字通り国民と国家の関係を法制度上も逆転させようという構想でありますけれども、経済運営という面においてもその魂胆が最近はっきり見えてきたという気がします。

「日本の稼ぐ力を取り戻す」ために国民一人一人が奮励努力せよ

それが非常にはっきり見えたのが、閣議決定を経て去年の6月末に政府から発表された『日本再興戦略2014年版 未来への挑戦』という文書を読んだ時です。この文書では「取り戻す」という言葉はもうひとつの別のキーワードと結びついた形でまた前面に出てきています。それは「稼ぐ力」という言葉です。「日本の稼ぐ力を取り戻す」ということがとても大きなテーマとして掲げられています。日本の稼ぐ力を取り戻すために、生産性向上とか、競争力の強化とか、技術開発の推進とかを気合いを入れてやらなくてはならないと書いてあるわけですが、その稼ぐ力を取り戻すことに臨むにあたって、企業経営者をはじめとして、国民一人一人が「日本の稼ぐ力を取り戻す」というテーマを自分の課題として受け止めて、生産性の向上や競争力の強化や技術開発の推進とかにどんどん取り組んでいかなければいけない、あなたたちが自分の問題として受け止めて取り組んでいくということがなければもう明日はないと思えと、日本経済にとってのラストチャンスというようなことが書いてあります。国民一人一人がこの課題を受け止めて、総員奮励努力せよ、とそう言わんばかりです。

「日本再興戦略」は政策文書ですから、国民に対するサービス事業者である国家がお客様である国民に、日本の稼ぐ力を取り戻すためにどんな工夫やサービスを提供しようと考えているのか、そういう語りかけをするものですが、そんな姿勢はみじんも見られない。稼ぐ力を取り戻した日本国の姿をめざして国民がその努力というサービスを全面的に提供しなければいけないよと言っているわけで、その主張の中に国民と国家の関係を逆転させようという発想がにじみ出ています。

『日本再興戦略』が、地方創生、女性の活躍推進をかかげるのも、稼ぐ力を取り戻すため

国というサービス事業者が、地方経済、地域社会の痛み、疲弊を憂えてこれを何とかしなければいけないという思いで、こういう政策を提供しますと言っているわけではなく、強い日本を支えるための活力ある地方を作り出す、そういう形で地方創生を考えているにすぎない。女性の活躍を推進するのは、要するに日本の成長力を高めるために十分には利用してこなかった女性という名の資源の利用率をもっと上げる、日本の稼ぐ力を取り戻すためにもっと女性たちに働いてもらわなくてはならない、成長戦略の一環としてということを実もふたもない正直さで「女性活躍推進法案」にはっきり書いてある。

チーム・アホノミクスにとんでもないところに連れて行かれないために

我々に必要な、持つべき認識、めざすべき場所がある。持つべき認識は、冒頭で述べた経済活動は人間の営みであって、人間を幸せにするためにあるということにつながる認識ですが、ではどのような認識が幅広く共有されれば、そのような人間を幸せにする人権の礎たる経済活動が保障されるのか、その意味で持つべき認識を我々に示してくれたのが、孔子の「己が欲するところに従えども矩をこえず」という言葉です。自分がやりたいことをやりたいようにやる、自分の欲を追求するというのが「己が欲するところに従う」ですが、されど「矩をこえず」、矩というのは社会規範とか倫理性とか節度とか、人に迷惑をかけない、人を傷つけない、人の人権をないがしろにしないそういう行動パターンの総称です。孔子は経済についてこういうことを言ったわけではないのですが、私は経済活動というのはまさにそういうものだと思います。経済活動は欲を追求する中で展開しますが、それをやっても決して人を不幸にすることはなく、人権を踏みにじることはなく、絶対ブラックな行動には及ばないというのが経済活動の経済活動たる姿、それが「己が欲するところに従えども矩をこえず」に表現されていると思います。「取り戻したがり病」にかかっている人たちに振り回されないための出発点が欲と矩の黄金バランスの経済活動に関する認識だと思います。

そのような認識を持った上で、めざすべき場所はどのような場所か。一つは「多様性と包摂性が出会う場所」、もう一つは「正義と平和が抱き合う場所」です。「多様性と包摂性が出会う場所」は、多様な特性を持った人たちが、自分と全く違う相手を抱き留め、ともに生きる世界です。簡単に実現できることではありませんが、そこが我々がめざすべき理想郷です。今までの日本の経済社会を考えてみると、包摂性はあるが、多様性ではなくて均一性が支配している「包摂性と均一性が出会う場所」でした。終身雇用や年功序列、護送船団方式などこれまでの日本の経済社会は包摂性が高かったといえます。但し、そのような包摂性の腕の中に抱き留めてもらうためには、あまり人と違うことを言ったりやったりして

はいけない、横並びをそれなりに意識して均一の論理に身をゆだねなければならなかった。

それに対して、多様性はあるが包摂性はない「包摂性と排他性が出会う場所」が残念ながら今のヨーロッパです。「多様性と包摂性が首尾よく出会う場所」というのを我々が手に入れるのは難しいですが、欲と矩のバランスを保つ感覚を持っていればその場所に到達することはできると思います。

「正義と平和が抱き合う場所」というのは旧約聖書の中に出てくる言葉です。旧約聖書の詩編に「慈しみと誠は巡り会い、正義と平和は抱き合う」、神の国はそういう場所と言われているわけですが、現実の世界においては「慈しみと誠はすれ違い、正義と平和はいがみ合う」。「イスラム国」を見ればよくわかります。正義がぶつかればそこにあるのは平和ではなくて戦争です。いかに正義と平和が抱き合うことが難しいか、一番典型的に長らく我々に示し続けてきたのが「イスラム国」問題と関係がありますが、パレスチナ情勢です。現実の世界においては「正義と平和が抱き合う」のはとても難しいことですが、しかしこの難しいことを実現させるのだという思いを人々がしっかりと抱いていれば、「大日本帝国を取り戻す」などという発想に翻弄されるはずはないわけですし、国民国家において国民と国家の関係を逆転させようというような発想にすきをつかれることも決してないはずです。

安倍政権がめざしているのは富国強兵路線である。アホノミクスで富国を実現し、憲法改正で強兵を実現する、この路線をひた走り大日本帝国を取り戻すという流れですべてが考えられている。

これと真っ向から対峙する、多様性と包摂性が出会う場所、正義と平和が抱き合う場所に私たちが首尾よく到達することができた時、そこに我々を待ち受けてくれているのが日本国憲法である。日本国憲法は、多様性と包摂性が出会うということが論理的ベースになっている。前文の「諸国民との協和」がそれを象徴している。憲法9条の戦争放棄は、正義と平和が抱き合うことをめざしている。そういう場所に我々は間違いなく到達しなければいけない。 (文責・白井篤子)

浜矩子さんの講演を聞いて

田中洋子 (福吉台)

2月22日、エコノミスト浜矩子氏の講演が西神オリエンタルホテルであり、「幸せのための経済学」を聞かせていただきました。講演はとても良かったです。いい勉強になりました。首相が唱えているアベノミクスについて、経済学者らしく鋭い視点で観察されているなど思いました。政治家は人間に優しくしなければいけないのに、人間に目が向けられていない。「取り戻したがり病」にかかって見えるべきものが見えなくなっている、考えてはいけないことを考えてしまう。日本経済の現状は壊れたホットプレート、豊かさの中の貧困が大きな問題です。経済活動は孔子の言葉「己が欲するところに従えども矩をこえず」を常に心して欲しい。

政治経済のトップに立つ人の条件は、共感性、人の痛みに思いをはせる、もらい泣きができる大人の感性を持った人。我々もこれらのことを頭において生活していれば、待ち受けているのが正義と平和が抱き合う場所、日本国憲法である、と。

2時間あまりの講演でしたが、背筋をピンと伸ばして身じろぎもせず、のどを潤すこともなく、時にはユーモアを混ぜてお話されました。あの小さな体のどこにあのようなパワーがあるのかと圧倒されました。私としては久しぶりに内容のいい講演に出会えて感動しました。浜先生、どうも有り難うございました。

「憲法9条の会・岩岡」第9回総会のお知らせ

と き：2015年5月3日 (日・憲法記念日) 13:00開場

ところ：岩岡連絡所1階多目的ホール (予定)

13:30～14:00 「外国人から見た憲法9条」ジム・デーヴィスさん (福吉台在住)

14:00～14:15ごろ 質疑応答

14:15ごろ～15:05ごろ DVD上映「シリア内戦 イスラム国の正体を暴く」

(2015年1月 西谷文和さん制作)

15:05ごろ～16:00 バザー

第86回世話人会

と き：3月21日 (土・祝) ところ：岩岡連絡所多目的ホール (小)

